撮影:伊藤芳保

撮影:村井勇

撮影:伊藤芳保

撮影:伊藤芳保

今なお新潟で語り継がれる映画作家・佐藤真。彼が遺した作品と今ある人々の言葉でつづる回顧の旅。

新潟水俣病の患者でもあった、阿賀野川沿いに暮らす3組の老夫婦の生活・日常を見つめたドキュメンタリー映画『阿賀に生きる』が公開されて、今年で25年になります。

今なお不思議な人気を保ち続けるこの映画は、当時20〜30代だった7人の青年が、現場で3年の共同生活を送り、新潟県内外の多くの人々の支援を得て撮影が行われました。

ラッシュフィルムが山形国際ドキュメンタリー映画祭で上映され、監督とカメラマンが公開の場で意見の違いをぶつけあい、編集においても、監督とスタッフたちが意見をはげしく戦わすなど、制作過程自体が彼らが育った戦後民主主義的な非ヒエラルキー的あり方で行われた点でも、特異な映画です。

完成時34歳の佐藤真は、これが初監督作品。カメラを担当した小林茂はそれまでスチール写真の経験しかなく、ほかのスタッフも全員が映画に関わるのは初めてというメンバーが作り上げた映像作品は、公開後反響を広げ、ドキュメンタリー映画としては異例の劇場公開が実現。さらに、多くの国内外の映画賞を獲得し、今では日本のドキュメンタリー映画史上の重要作品と位置づけられるまでになりました。

佐藤真はそれから、2007年に49歳で亡くなるまでの間に、さらに5本のドキュメンタリー映画を監督しました。

それら一作一作は、処女作の奇跡と謎を振り返り、映画とは、ドキュメンタリーの本質とは何かを、ひとりの映画人が深く問い続けた証でもあります。

生きていればこの秋で60歳になる映画監督・佐藤真。彼が深く関わった土地である新潟で、『阿賀に生きる』を含む全作品(劇場公開作品の全部と、その他の映像作品)を上映します。

『阿賀に生きる』は佐藤真に何を語り、問い、教えたのか。遺された映像を見つめ、さまざまなゲストのトークに耳を傾けながら、考えます。

佐藤 真
さとう まこと

1957年9月12日、青森県生まれ。東京大学文学部哲学科卒業。大学在学中より水俣病被害者の支援活動に関わる。1981年、『無辜なる海』(監督:香取直孝)助監督として参加。1989年から新潟県阿賀野川流域の民家に住みこみながら撮影を始め、1992年、『阿賀に生きる』を完成。ニヨン国際ドキュメンタリー映画祭銀賞など、国内外で高い評価を受ける。以降、映画監督として数々の作品を発表。他に映画やテレビ作品の編集・構成、映画論の執筆など多方面に活躍。京都造形芸術大学や映画美学校で後進の指導にも尽力。2007年9月4日逝去。享年49。

会場
新潟・市民映画館 シネ・ウインド
TEL.025-243-5530
新潟市中央区八千代2-1-1
※新潟伊勢丹向い・万代シテイ第2駐車場1F
※新潟駅万代口より徒歩10分

関連企画展 「映画監督・佐藤真の新潟—反転するドキュメンタリー」 会場:砂丘館ギャラリー(蔵)

9|15 fri.—10|15 sun. | 9:00-21:00〈観覧無料〉
休館日:月曜(9/18、10/9は開館)、9/19(火)、9/26(火)、10/10(火)

映画『阿賀に生きる』の関連資料、スチール写真(村井勇撮影)、牛腸茂雄、石塚三郎の写真、佐藤哲三の絵画、ほか佐藤真の著書、映像関連の資料などを展示

9|18 mon. 10:30-11:30 ギャラリーツアー(展示解説)
〈参加無料・予約不要〉

9|24 sun. 13:00-14:30 佐藤真作品『写真で読む東京』
DVD上映〈参加無料・予約不要〉

9|24 sun. 15:00-16:30 ギャラリートーク「佐藤真と写真」※
飯沢耕太郎(写真評論家)+大倉宏(砂丘館館長)

10|4 wed. 19:00-20:30 ギャラリートーク
「佐藤真はアートとどう向き合ったか」※
椹木野衣(美術評論家)+清田麻衣子(里山社主宰)+大倉宏

「飯沢耕太郎さんと長野重一さん」
写真提供:NHK・スコブル工房

『写真で読む東京』
1996年NHKのETV特集として放映。東京と向き合った4人の写真家をとりあげた。インタビュアーは飯沢耕太郎。『SELF AND OTHERS』に先行する、佐藤真が「写真」と向き合った映像作品。

※ギャラリートーク:参加費500円(電話、FAX、E-mailで要予約)・定員各40名

主催/砂丘館 協力(一部事業共催)/新潟と会

砂丘館
(旧日本銀行新潟支店長役宅)

新潟市中央区西大畑町5218-1 tel.&fax.025-222-2676
sakyukan@bz03.plala.or.jp http://www.sakyukan.jp/

ドキュメンタリー映画監督作品

©阿賀に生きる製作委員会

『阿賀に生きる』
1992年/1時間55分/阿賀に生きる製作委員会
撮影:小林茂
新潟水俣病の舞台ともなった阿賀野川流域に暮らす人々を、3年間撮影。社会的なテーマを根底に据えながらも、そこからはみ出す人間の命の賛歌をまるごとフィルムに感光させた傑作。

©「まひるのほし」製作委員会1998年

『まひるのほし』
1998年/1時間33分/「まひるのほし」製作委員会
撮影監督:田島征三/撮影:大津幸四郎
登場するのは7人のアーティストたち。彼らは知的障害者と呼ばれる人たちである。創作に取り組む彼らの活動を通し、芸術表現の根底に迫る。

©牛腸茂雄

『SELF AND OTHERS』
2000年/53分/ユーロスペース/撮影:田村正毅
1983年、3冊の作品集を残し35歳で夭逝した写真家、牛腸茂雄。残された草稿や手紙と写真、肉声をコラージュし、写真家の評伝でも作家論でもない、新しい映像のイメージを提示する。

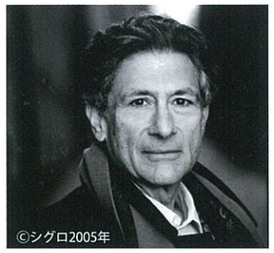
『阿賀に生きる』製作に携わったメンバーによるコメント付き上映〈ライブコメンタリー上映〉を行います。詳しくは裏面をご覧下さい。

©シグロ2001年

『花子』
2001年/1時間/シグロ/撮影:大津幸四郎
京都に暮らす花子は知的障害者のためのデイセンターに通う一方、夕食後、畳をキャンバスに食べ物を並べ、母はその「たべものアート」を写真に撮る。花子と彼女をとりまく家族の物語。

©カサマフィルム

『阿賀の記憶』
2004年/55分/カサマフィルム/撮影:小林茂
『阿賀に生きる』から10年。かつて映画に登場した人々や土地に再びカメラを向ける。人々と土地をめぐる記憶と痕跡に向き合い、過去と現在を繊細かつ大胆に見つめた詩的作品。


©シグロ2005年

『エドワード・サイード OUT OF PLACE』
2005年/2時間17分/シグロ/撮影:大津幸四郎
2003年、パレスチナ出身の知識人、エドワード・サイードが亡くなった。イスラエル・アラブ双方の知識人たちの証言を道標に、サイードの遺志と記憶を辿る。

展示映像・ビデオ作品

『狐火伝説の町・津川』
1995年/15分/企画:新潟県津川町狐の嫁入り屋敷
撮影:小林茂、坂井敦
津川に伝わる狐火伝説を、その歴史に幻想的な演出も交え紹介する。狐の嫁入り屋敷 展示映像。

『水俣病 Q&A』
1996年/30分
使用作品=土本典昭全水俣シリーズ、ほか
水俣病の公式発見から40年目の年に過去のものではない水俣病の「現在」を考える。水俣・東京展 展示映像。

『新潟県の歴史』
2000年/25分/企画:新潟県立歴史博物館/撮影:坂井敦
語り:永島敏行/音楽:経麻朗
石器時代以降の新潟県域とそこに暮らした人々の、時代ごとの変化を描いた映像郷土資料。

『表現という快楽』
2001年/43分/撮影:大津幸四郎/編集:飯塚聡
「障害者アート」の作家たちの制作風景を撮影した、【21世紀アートのエネルギーをみる展】展示映像。

『市場最大の作戦』
2001年/25分/16ミリフィルム作品/撮影:宮武嘉昭
子どもたちとワークショップ作品として作った、【キッズ・アート・ワールドあおもり2001】展示映像。

『星の文人 野尻抱影』
2002年/48分/撮影:柳田義和/音楽:経麻朗
紀伊國屋書店評伝シリーズ「学問と情熱」第22巻。冥王星の和訳命名者でもある野尻抱影の素顔に迫る。

『中東レポート
アラブの人々から見た自衛隊イラク派兵』
2004年/43分/編集:佐藤真・秦岳志
シリア人ジャーナリスト、ナジーブ・エルカシュとともに2004年3月にアラブ諸国を訪れ、中東の知識人や文化人、難民キャンプに生活する人々に自衛隊イラク派兵についてインタビューした記録。

個人映画

『保育園の日曜日』
1997年/20分/サイレント/監督・撮影:佐藤真
製作:豊川保育園おやじの会
佐藤監督の娘が通う豊川保育園での様子を映した20分の短編サイレントドキュメンタリー映画

『女神さまからの手紙』
1998年/30分/カサマフィルム/監督・撮影:佐藤真
協力:社会福祉法人豊川保育園、保育園父母の会
私家版の8ミリフィルムで撮影された作品。娘の成長記録とみずからの生活の記録から、映画としてのフィクションが新たに立ち上がってくる遊び心あふれるドキュメンタリー。

構成・編集作品

『おてんとうさまがほしい』
1994年/47分/16ミリフィルム作品
撮影・照明:渡辺生/構成・編集:佐藤真
映画照明技師、渡辺生がアルツハイマーを患う妻と向き合う日々を記録。編集の佐藤真は白とびしたフィルムで溢れる妻への思いを表現する。

関連作品

『テレビに挑戦した男・牛山純一』
2011年/1時間22分/監督:畠山容平/企画:佐藤真
テレビドキュメンタリー界の草分け的な人物であるプロデューサー・牛山純一の業績をたどる。佐藤真の企画により制作がスタート。佐藤の他界後に映画美学校で彼の教えを受けていたゼミ生たちが引き継ぎ完成させた。

書籍

『日常と不在を見つめて
ドキュメンタリー映画作家 佐藤真の哲学』
90〜00年代、震災前「見えない世界」を描こうとした作家の格闘の記録。

佐藤真に惹きつけられた32人の書き下ろし原稿とインタビュー、佐藤真の単行本未収録原稿を含む傑作選を収録。映像作家であり、90年代後半の類稀な思想家とも言うべき佐藤真の哲学を掘り下げ、今を「批判的に」見つめ、私たちの確かな未来への足場を探る。
http://satoyamasha.com/?p=759

里山社刊/四六版/並製本/カバー帯あり
368頁(カラー16頁含)/定価3,500円(税別)
装丁:川名潤(Prigraphics)

シネ・ウインド、砂丘館の他、北書店(中央区医学町通)、BOOKS f3(中央区沼垂東)、英進堂書店(秋葉区程島)など、新潟市内書店で販売しています。